

○ことのはじまり

99年7月に開かれた近畿和算ゼミナールの席上、竹之内脩^[1]先生から「面白い人を紹介してあげる」と言われ、「ペプチド研究所所長・大阪大学名誉教授 理学博士 芝哲夫^[2]」と記された名刺をいただいた。

私は、ライターという商売柄、ジャーナリストのような一面も持っており、初対面の方と会うのに抵抗がない。臆面もなく、芝先生に連絡をとった。それで多少の紆余曲折はあったが、竹之内先生と芝先生と私の三人で、千里中央で会うことになった。七月の和算ゼミからおよそ二週間後のことだ。

×月×日 両先生と千里中央で会う。芝先生へは名刺がわりに、私が書いた近畿和算ゼミナール報告集(2)「華自紅—和算とキリシタン—」と「内田五観に関する史料・論考集」と題した約百頁のコピーをお渡しした。

ビールを飲みながらの談なかばにして、芝先生が武田薬品の五代目武田長兵衛の集めた書物についてお話をされた。なんと、なかに国宝が三点。「ぜひ目録を見せて下さい」とお願いした。杏雨書屋(きょうう・しょおく)というところに保管されているらしい。

数学がご専門の竹之内先生と、化学がご専門の芝先生とは、70年頃の大学紛争をきっかけに、交際を始められたとのこと。「僕たちの世代の功績ですね」と言うと、両先生とも、なにを馬鹿なことを言っておるのか、という顔をされた。

○蔵書二万部十萬冊

×月×日 阪急十三(じゅうそう)駅から神戸線沿いに歩いて五分ほどの、杏雨書屋をはじめて訪問^[3]。正確には、武田科学振興財団・杏雨書屋。一般に公開されており、私のような職業・所属の怪しい人間でも、図書が閲覧できる。

閲覧室で、先に来ておられた芝先生が、何やら古文書(こもんじょ)を読まれている。芝先生は杏雨書屋の運営協議委員。担当のS部長とH嬢に紹介していただく。H嬢は、中学校の理科の先生みたいな白衣姿。図書館でこのような白衣は珍しい。

早速、閲覧室に備えつけてある杏雨書屋蔵書目録(臨川書店・昭和五十七年)と、持参した明治前日本数学史第五卷(岩波書店・リプリント版)の巻末にある人名索引との参照作業を開始した。人名の「あ」から始めたので、まず、青山幸哉・西洋度量考が目を引いた。元禄年間の井口常範・天文図解もある。天文図解の一部は、日本哲学全書に所収されているが、この日本哲学全書第八巻自体もある。

[1] たけのうち・おさむ 1925年—2020年。

[2] しば・てつお 1924年—2010年。

[3] 2013年に大阪市中央区道修町(どしょうまち)の武田薬品旧本社ビルに移転。

午後三時ちょうどに、コーヒーと日本茶とお菓子が出された。ありがたく頂戴し、青山幸哉の西洋度量考に見える弗（ほつ）について、芝先生としばらく雑談した。芝先生は、「どこかで見たような気がする」とおっしゃる。

弗は、ロドリゲスの日本大文典や、一部の和算書、長崎ソロバンの数目盛りなどに使われている。芝先生が何気なくもたらされた感想のゆえんは、次回の訪問でわかることになる。

ここで、杏雨書屋の概要をご紹介しておく。

蔵書は二万部十萬冊。明治・大正・昭和の洋装本や洋書以外は、全部、秩（ちつ）に入っており、保存状態はきわめて良い。

武田科学振興財団が保有しているぐらいだから、中心は漢方医学書、本草書、ほかに博物、蘭学、地誌、東洋学、科学技術史、仏典などの諸分野に及ぶ。国宝三点、重要文化財九点。重文には、**聖徳太子伝暦**六冊も含まれる。（この聖徳太子伝暦は、近藤正斎の右文故事巻之一にある本國寺本とは、冊数が異なっている。本國寺本は二冊）

個人旧蔵のコレクションが多く、内藤湖南の手沢本、藤浪剛一氏旧蔵の曲直瀬家伝来本や宇田川家伝来本、三木栄氏収集の朝鮮版医書、阿知波五郎氏収集の医学史関連洋書などを所蔵している。

和算書そのものは、蔵書目録にはほとんど見当たらない。井口常範の天文図解や曲直瀬家伝来本のような、和算史やキリシタン史に関連する書籍は、多数ある。

もちろん**周易**（易経）、**尚書**（書経）のほか、**二十四史**、**八史経籍志**など東洋学の基本文献は、そろっている。

閲覧室には、諸橋轍次の**大漢和辞典**、**国書総目録**、**国書人名辞典**、**近代日本総合年表**、**内閣文庫蔵書目録**（閲覧室ではなく蔵書のなかに**浅草文庫書目解題略**もある。浅草文庫は内閣文庫の前身）などが常備されている。

○弗（ほつ）をめぐる

×月×日 蔵書目録のなかから、閲覧したい本をノートに転記してゆく。あらかじめ著者名、書名をノートに控えておいて、事前に下調べをしてから、閲覧したほうが良いと考えたからだ。

目録検索・下調べ・閲覧という三段階方式を、この日から取ることにした。

漢籍の**周髀算経**を見たいと、かねがね思っていたが、杏雨には、中華民国の時代に発刊された叢書**四部叢刊**が、正統あわせて約二千五百冊、全部そろっていることに気づいた。四部叢刊の**周髀算経**には、中国での読み方を示す音義が付属している。同じように四部叢刊本の**九章算術**にも、音義が付属している。（臨川書店の蔵書目録は、四部叢刊として、約二千五百冊をまとめて記している。いちいち書名をあげていない。あとでわかったが、四部叢刊に含まれる算書は、周髀算経と九章算術だけ）

この日は、**青山幸哉・西洋度量考**と、**宇田川榕庵・西洋度量考**二種を読み比べてみた。

榕庵自筆の西洋度量考には、決定稿と未定稿の二種が存在する。決定稿は、貴重本となっており、写真版でしか閲覧できない。書き込みや消跡が生々しく残っている未定稿は、原本を閲覧できた。榕庵はじつにマメな人であることがよくわかった。

調査対象としては、この未定稿のほうが値打ちがあるように思うが、なぜか綺麗に清書してある決定稿のほうを、杏雨では貴重本としてあつかっている。

この榕庵の西洋度量考に、弗が使われている。芝先生は、きっとこれをご覧になったのだろう。

内容がそっくりそのままなので、青山幸哉は、榕庵を出所とする写本を参照したにちがいない、と考えた。ただし、**大槻如電・洋学年表**に、榕庵のオランダ語の師匠である馬場佐十郎が西洋度量考を著した、という記事がある。

長崎ソロバンの数目盛りに見られるように、長崎では、ごく当たり前に弗が使われていたようだ。榕庵の自筆稿本にかぎらず、弗の使用例は、探せばもっと見つかるかもしれない。

○田原仁左衛門と田原嘉明

×月×日 ノートに控えておいた、**吉田宗恂・歴代名医伝略**と、**宋・劉温舒の素問入式運氣論奥**を閲覧する。と言っても、歴代名医伝略は刊本三種、写本一種があり、素問入式運氣論奥は、曲直瀬道三の蔵本やら中華民国時代の刊本やら合計十一種もあり、じっくりと読むわけにはいかない。むろん私には漢文の読解力がおおいに不足している。閲覧とは名ばかり。「閲」はできない、「覧」をした程度のこと。

さて、歴代名医伝略の寛永十年版の下巻末尾と、素問入式運氣論奥の寛文十一年版のやはり巻末に、刊行者として「田原仁左衛門」の名前がある。素問入式運氣論奥は、武村市兵衛との相版。

新刊算法起の著者・田原嘉明は、人名辞典などには、「田原仁右（左）衛門嘉明」という調子で紹介されており、通名が仁右衛門か仁左衛門かはっきりしない。亡くなった平山諦先生は、田原仁右衛門嘉明としつつ、田原嘉明が素問入式運氣論奥・寛文十一年版を刊行した、とされている。

田原嘉明は円方四巻記の初坂重春と同一人物である、という説もある。

そこで、和算家田原嘉明の通名が仁右衛門か仁左衛門か、田原嘉明が刊行者の田原仁左衛門と同一人物か、田原嘉明と初坂重春が同一人物かどうか、つごう二の三乗、八通りの説ができる。歴代名医伝略を寛永十年に刊行した田原仁左衛門と、素問入式運氣論奥を寛文十一年に刊行した田原仁左衛門とを、同一人物とする、あるいは、親子などの関係とする、という選択肢もある。このときは、つごう十六通りの説が生まれる。

十六人の論客を集めて議論させたら、さぞや面白ろかろう、などと不埒（ふらち）なことを考えながら、杏雨書屋をあとにした。

この件は、後日談がある。

安藤洋美先生に問い合わせたところ、小川正意・大元授時曆立成の刊行者も田原仁左衛門

だとわかった。

また、田原仁左衛門の住所である二条通鶴屋町は、京都の地名で、将軍綱吉の時代に現在の二条通亀屋町に変わった、と和算ゼミの参加者から教えていただいた。

素問入式運氣論奥・寛文十一年版を田原仁左衛門と相版した、武村市兵衛の名前は、都の錦・元禄太平記に見えることも、申し添えておく。

○原本を読むか・復刻版を読むか

×月×日 高野長英全集第四巻のなかの星学略記と遜謨兒四星編を読む。どちらも写真版で、原文のコピーを読むに等しい。長英が毛筆で書いたオランダ語の部分は、かすれて判読できない。大した量でもないのに、綴りさえわかれば、なんとかかなりそうだが、その綴りが読めない。長英の蘭文星学は、全部オランダ語で手におえないが、「詳証館」の用箋に書いている。（なぜこんなことを調べるのか、事情を簡単に説明しておく。詳証館は、関流六伝宗統の内田五観が使った言葉。かつて小松醇郎先生は、高野長英のほうが内田五観よりも見識があった、という説を述べられた。私は、内田五観のことをいろいろ調べているうちに、どうも小松先生の説は逆ではないか、と疑問をいただいている）

長英の著作では、二物考の天保年間の刊本が杏雨にある。明治十六年の重刻本もあるし、明治十五年の三物考もある。もとの刊本と、活字になった復刻版、の両方を確かめることができるので、たいへんありがたい。

棄教したフェレイラ神父の乾坤弁説は、文明源流叢書第二で読むことができる。帆足万里・究理通は、江戸時代の刊本を所蔵。

なお、乾坤弁説で有名な向井元升、その子・向井元成ほかの略伝は、向井氏由緒書という写本で残っている。（俳人の向井去来は元升の次男）

個人旧蔵のコレクションが多いので、国宝になるような古典籍、稀覯（きこう）本から、近代の書籍まで、とにかくいろいろある。

東洋文庫の今泉みね・名ごりの夢—蘭医桂川家に生れてや、昭和十七年の浅見綱斎遺著集があるかと思えば、大正年間再版のクラセ・日本西教史、明治二十六・二十七年刊行の塙保己一・群書類従五百三十巻もある。群書類従は、どういうわけか、同じ目録が二部ある。

×月×日 明治十二年再刻の吉雄俊蔵・西説観象経をパラパラと広げる。折りたたみ式のお経になっている。林鶴一・和算研究集録の脚注にある、布多禄某斯〔プロメウス〕や地谷〔テイコ〕などの振りがなが、ちゃんと付いていることを確認する。

×月×日 宇田川榕庵自筆の榕庵随筆を眺める。蘭文・漢文・くずし字が混じっている。私にはロクに読めない。翻訳の下書きと思われる部分に、「造物主」や「造物者」の用語を使っている。

海老沢有道・南蛮学統の研究増補版に、テレンツ・遠西奇器図説の旧蔵者および引用者と

して宇田川榕庵の名があがっている。確かに、榕庵随筆は、遠西奇器図説の目次を写している。

×月×日 清代の叢書**西学大成**を見る。徐光啓・句股義、利瑪竇授・李之藻演の**圓容較義**、梅文鼎・平三角法**挙要**などの算書が含まれている。目次の部分と本文を見比べながら、せつせと西学大成のリストを作成した。

ほかに一九〇〇年ごろの叢書には、**格致叢書**がある。所収の算書は、初等的な算術書。

×月×日 吉田角倉家については、以前から調べていたが、**角倉賀道・牛痘新論**を読む。明治二十五年発行の小さな薄いパンフレット。巻末に「天真堂・武原咲」の広告がある。

×月×日 蔵書目録で、徐岳・**数術記遺**を見つけ、閲覧しようとしたが、書庫に見当たらないとのこと（私はまだ書庫には入れてもらえない）。蔵書目録は、明代の叢書・**說郛**（せつぷ）に、あたかも**数術記遺**が含まれているかのように書いている。

宇田川家伝来本の**說郛目録**（写本）には、「術数記遺」として記されている。臨川書店の蔵書目録は、この**說郛目録**を参照した模様。大漢和辞典の「説」のところには、**說郛**百二十卷の全書名があるが、**数術記遺**は載っていない^[4]。

×月×日 **夢遊道人・西洋雜記**の写本二種を読んだ。一つは宇田川家伝来本。第一丁の表に宇田川家の蔵印がある。杏雨には、**小野則秋・日本の蔵書印**があり、こんなときの参考になる。

この西洋雜記の写本二種では、ノアの方舟で知られるノアを「諾厄」や「諾泥」としている。（これも内田五観に関連した事項。川尻信夫先生は、五観が西洋雜記を見て「ノア」に特殊な当て字を使った、とされている）

×月×日 **南蛮阿蘭陀膏法**に付属している**阿蘭陀カスパル伝拔書**（カスパル流秘伝書）を見る。書き方は、江戸時代の漢方医学書とよく似ている。

○干天の慈雨

杏雨とは、杏林（医学界）をうるおす雨の意味だという。私にとって、杏雨書屋の蔵書は干天の慈雨。宝の山のように感じた。

医学史では、曲直瀬道三（一溪、名は正盛）がキリシタンだったことは、常識だと思う。

和算史では、和算家の吉田光由や今村知商がキリシタンだったとは確定されていない。そんなことはどうでもよい、という意見もある。私は、キリシタンだと考えている。そのほうが、多くの歴史的な事柄を説明できる。つじつまが合う。新しい数学思想史を展開することができる。数学の公理のように、生産的だと思っている。

キリシタン信仰が禁制された江戸時代は、白く濁った深い霧に包まれている。杏雨書屋の蔵書が、この霧を追い払う日がいつか来るだろう。これからも杏雨書屋で閲覧を続けていきたい。

[4] 数術記遺は、上海古籍出版社の**說郛三種**（全十冊）のうち**說郛**一百二十号の写一百九にある。写（ケン）は巻の古字。